

宿縁

二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

たきぎに火がつくと

たきぎは火になる



真理(本当のこと)に目覚めた仏陀釈尊はその教えを私たちに説かれました。それが仏教です。その教えを学び身につけたものはすべてこの上ない安らぎを得ることができると、人びとはなぜその道を真剣に求めようとしないのでしょうか。

「釈尊はクシナガラ郊外、シャーラ(沙羅)樹の林の中で最後の教えを説かれました。

「弟子たちよ、おまえたちは、おのおの、自らを灯火とし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法を灯火とし、よりどころとせよ、他の教えを

よりどころとしてはならない。

弟子たちよ、これまでおまえたちのために説いたわたしの教えは、常に聞き、常に考え、常に修めて捨ててはならない。もし教えのとおりに行うなら常に幸いに満たされるであろう。」(仏教聖典より)

さて、人びとの生き方は、これとはうらはらに、説かれたこの教えに背き日々の生活に振り回され、他人の言動に惑わされて右往左往して落ち着くことがありません。

真理(本当のこと)の反対語は嘘(うそ)ですから嘘の人生を積み重ねていることになりま。一番恐ろしいのはその事に気がつかないことです。もつといえは本当のことが嫌いで嘘のことが好きなのです。さらにいえば真の幸いを求めることに心がなく、不幸の積み重ねを仕方ないと思っている生き方であるといったら言い過ぎでしょうか。

仏教をこの世ではじめて大きく説き明かされた釈尊は、人間とそれを取りまく自然にその透徹した眼を向けられ、ついに「諸行無常(しよぎようむじよう)」「諸法無我(しよほうむが)」という二つの真理を見出されました。諸行無常とは、自然も、私たちもすべてはうつろい易く、時々刻々に生滅変化していくものであるということです。そして、そうであるならば、自己に関して永久不変な実体というものなど、あろうはずがないというのが、諸法無我の意味です。

しかし、今ここに生きる私たちの実体というものを考えれば、無常・無我ということの真の納得が、いかに難しいものであるかということ。私たちが、こうした真理(本当のこと)を示された時、それは確かに真実であろう、と、いちおう納得してみますが、同時に、無常だというけれども、今日の(私)は、数か月前の(私)と何一つ、あるいは、ほとんど変わらないではないかという思いをつのらせるのではないのでしょうか。遠く幼い頃の自分と比べれば、確かに成長という変化があるわけですが、それでも、何かしら変わらないものが自分の中にあることを、私たちは実感として持っています。そして、その(変わらない)というところに引き寄せられて、それを自己に関する実体的なものと考えて執着に気持ちをとくましくしていくのが、私たちの姿ではないかと思えます。

老いたるも 若きも死ぬる習いぞとしりかほにして しらぬ身ぞうき

(僧英俊 道歌)

(人間というものは、いずれは死んでいくものなのだ、と、誰もがわけ知り顔でいうけれども、そういうながら生に執着し、自己に執着して生活している。本当は、わかっていないのだ。憂きことだよ。)

こんなはずではなかった!こんな目に遭おうとは思はなかった!との繰り返しは、この歌のとおり、ほんとうは、わかっていないということのあらわれです。

しかし、ここに今までと違う眼の転換があることを知らねばなりません。

「帰去来(かきこ)なりなんいざ、他郷(たごう)人間世界のモノサシ)には停まるべからず。仏に従いて本

家(さとりの教え)に帰せよ。本国(浄土)に還りぬれば、一切の行願、自然に成ず。悲喜交わり流る。深くみずから度(はか)るに、釈迦仏の開悟によらずは、弥陀の名願(南無阿弥陀仏のはたらき)いずれの時に聞かん。仏の慈恩を荷いても、実に報じがたし」

(教行信証 親鸞)

私たちが惑わす根本の煩惱を染汚心(ぜんましん)といつて、穢れたという意味です。常に自分のモノサシで判断する濁った心です。けがれた心とは、私たちがそれによって惑乱され、その結果、仏との距離がいつこうに縮まらないばかりか、いよいよ広がるようにする心のあり方です。

世間で間違つて使う「信心」は、大専(おほせん)自分の願いや望みを叶えるために神仏に依頼することと考えていますが、(信)といふことは、私たちの心を清めていく力をもつて、(たきぎと火)「安心(信心)決定鈔」の中の次の文章に注目しましょう。

「薪に火をつければ離れることなし。薪は私たちの心に譬えられる。火は必ずすべてのものを信に目覚めさせて捨てないとの仏の光明に譬える。だからわが心を離れて仏心もなく仏心を離れてわが心はない。これを南無阿弥陀仏という。」

仏法を聞くとは、薪に火がつくのです。薪は信の火となって我が身心を包みます。何事にも恐れな清い信の火が灯ります。